



# やまなし

2014.3.3

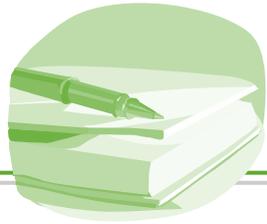
vol.11

no. 2

## contents

- 2 | 冊子体から電子版へ
- 4 | 利用者の声
- 5 | 学生にすすめる本
- 6 | 耐震・改修工事について
- 7 | 図書館トピックス
  - ・「生と死のコーナー」講演会について
  - ・トイレ改修工事について〔医学分館〕
- 8 | 今後のイベント紹介

The Yamanashi  
Bulletin of the University of Yamanashi Library



## 冊子体から電子版へ

山梨大学附属図書館 医学分館長 ミヤザワ ケイジ  
(医学部生化学講座第2教室) 宮澤恵二

昨年の3月、医学分館長のお話をいただいた時には、少し戸惑いました。実は、山梨大学に着任してから4年間、図書館には本館にも分館にも立ち寄ったことがなかったからです。本学だけでなく、前任の大学でも図書館に足を運ぶことはありませんでした。もちろん、図書館がなくても仕事ができるという訳ではなく（仕事をしていなかったということでもなく）、私にとって必要な図書館の機能が電子化され、図書館の建物まで行かなくても、研究室から利用できるようになったということに過ぎません。このような図書館利用法の変化は、2000年過ぎくらいから顕著になってきました。

私は生化学が専門ですが、この分野で伝統がある学術雑誌にJournal of Biological Chemistry (JBC) があります。アメリカの生化学・分子生物学会の学会誌で、雑誌が乱立した近年、以前ほどの権威はなくなりましたが、過去、少なからぬ重要な発見（ノーベル賞級のものも含む）の発表の舞台となった雑誌です。かつては研究室単位での購読も珍しくありませんでした。JBCは私が大学院生になった1980年代前半は隔週刊（年に24巻）で、1年分の分量は15,000ページくらいでした。しかし雑誌の厚みが年々、増加することを編集部が危惧したのか、その後、本文の相当部分（MethodsだけでなくResultsの一部も）がsupplementとして小さなポイントの文字で印刷された時期があります。虫眼鏡で見なければな

らないような大きさです。当時のコピー機の性能では、その小さな文字を複写することが困難で、コピーすると何が書いてあるのか、わからなくなっていました。よほど不評だったと見えて、この方針は間もなく撤回され、ページ数の増加が容認されるようになりました。こうして1986年から1年で36巻になり、1994年には年間53巻も出るようになりました。「世界で最も分厚い週刊誌」と揶揄されるようになったのもこの頃のことです。それでも週刊になった当初は年間に30,000ページくらいでしたが、雑誌の膨張はとどまるところを知らず、2000年頃には年間50,000ページを越えるほどになってしまいました。紙媒体の保管場所も馬鹿になりません。しかし幸い、その頃から電子版が普及し始めまし



た。図書館契約分が電子版で見られるようになると、研究室で個別に購読する必要はなくなりません。多くの人は電子版だけに目を通し、冊子体を読まなくなりました。そして2012年、JBCは冊子体の廃止に踏み切りました。ただ、冊子体をやめ

ても、毎号（毎週）表紙は制作しているので、筆者も含め、廃止に気づかない人が多かったようです。それから4ヶ月ほどした編集会議の席上、編



集長が「冊子体が廃止されたことを知っていた人、挙手してください」と発言しました。当該ジャーナルの編集委員の集まりであるにもかかわらず、手を挙げた人は半数にも満たず、会場は爆笑に包まれました。蛇足ですが、以前は論文を却下する時の理由に「この研究は面白い。しかし、雑誌のスペースの問題で掲載できない。ご理解いただきたい。」との文言がよく使われました。今後、このような説明は通用しなくなるかもしれません。どちらにせよ、学術雑誌の冊子体が使命を終えたことは間違いありません。

図書館機能の電子化は文献情報の検索から始まりました。現在、自分の研究に関係のある論文はパソコンでキーワード検索をかければ、簡単に探すことができます。以前は、代表的なキーワードごとに論文情報が掲載された冊子が定期的に刊行されており、図書館の入り口に近い場所で大きなスペースを占めていました。これがやがて、CD版からオンライン版へと、使い勝手がよくなり、更新頻度も高くなりました。その後、論文そのものも電子化され始めました。電子ジャーナルの普及前、多くの研究者は図書館に行って読みたい雑誌を探し、研究室まで持ち帰ってコピーし、再び返却しに行くという作業を繰り返していました。新着雑誌は持ち出し禁止だったので、自分の仕事に関係がある論文も、すぐにはじっくり読み込むことができませんでした。また、バックナンバーでも、読みたい号が貸し出されていたり

すると、出直さなくてはなりません。論文の巻号や出版年のメモを書き間違え、書庫の中で右往左往することもありました。現在ではパソコンでダウンロードボタンをクリックすれば、望みの論文のPDFファイルをすぐに取得することができます。

論文情報の検索機能は誰でも自由に使えますが、電子ジャーナルの多くは購読契

約が必要です。ここ数年、どこの図書館でも電子ジャーナル契約額の高騰に悩まされて来ました。本学でも一時期、契約している電子ジャーナルが削減され、研究の遂行に少なからぬ影響が出ていたことと思います。しかし財務担当理事のご尽力もあって、2014年から契約誌がかなり増えました。まだまだ読めない雑誌も多いのですが、電子ジャーナルの状況が大きく改善したことには違いありません。一方で、以前に契約削減の原因になった契約額の高騰そのものは未解決であり、将来的には契約雑誌を再び減らさざるを得ない事態も考えられます。「今のうちに」というと語弊があるかもしれませんが、現在の電子ジャーナル環境、大いに使っていただけたらと思っています。



## 文献複写サービスを利用させていただいて

医学部 産婦人科学講座  
オオモリ マキコ  
大森 真紀子

私は、学会発表や論文作成の際に、医学分館の文献複写サービスをよく利用させていただいています。いつもたいへん助かっており、とても感謝しております。

私が最近5年間に依頼した文献数（取得率％）は、2009年34件（68％）、2010年52件（64％）、2011年62件（82％）、2012年52件（81％）、2013年59件（69％）と多い方かもしれません（すべて私費）。依頼した文献が図書館に所蔵されているとキャンセルになり、がっかりします。所蔵されている棚を教えて下さるのですが、仕事が終わった後の夜間に図書館に行ってコピーするのは、けっこう大変です。

以前に比べ、文献が届くのがはやくなりました。カラーコピーも増え便利です。さらにわがまを言わせていただくと、図書館に所蔵されている文献でもコピーしていただけると助かります。カラーコピーの場合、微妙な色調がわかるように白い紙を使用していただけると助かります（これは依頼先の問題ですが）。文献がPDFで届くようになると、もっと便利です。MyLibraryの「文献複写・貸借申込み状況照会」欄が、著者名や表題などでソートできると、文献管理をする上で便利です。うっかり重複依頼してしまうこともなくなります。もちろん、オンラインでフリーに手に入る文献が増えるのが一番うれしいですが、最近ではWileyの文献が入手できるようになり、とても助かっています。

著作権、財政面、マンパワーの問題など、いろいろご苦労もあるかと思いますが、今後ともどうぞよろしくお願いいたします。



## いろいろな図書館のかお

教育人間科学部 幼児教育コース 3年  
タバタ ユミコ  
田端 友美子

皆さんはどのような目的で図書館を利用していますか？

図書館の利用目的は人によって様々です。私は主に勉強をする場所として利用しています。一人ひとりのスペースが十分に確保されており、机もたくさんの資料を広げたり、パソコンを広げることもできる大きなので、集中して勉強に取り組むことができます。また、何か分からないことがあればすぐに専門書等を探ることができるので非常に助かります。さらに、図書室には「グループ学習室」があり、実習でのグループワークの際には図書館にある教科書等を参考にしながら指導案や教材づくりに取り組むことができました。

様々な利用がされる図書館ですが、ところで皆さんは図書館に併設されている「子ども図書室」をご存知でしょうか。子ども図書室には約4000冊の絵本があり、「ぐりとぐら」などの懐かしい絵本はもちろん、定期的に入荷される新しい絵本などが並んでいます。また、紙芝居や絵本研究に関する本なども数多くみられます。子ども図書室は子どもだけでなく学生や地域住民の方々など、学内外を問わず利用することができます。

私はこの子ども図書室でボランティアをしており、入室する子ども達に絵本の読み聞かせをしたり、一緒に工作をするなどして遊んでいます。ボランティアの活動を通して、子どもと関わることの楽しさや難しさを感じている日々です。そして、ボランティアをする中で、「子どもが好きだな」としみじみと感じたりもします。

最後は宣伝になってしまいますが、「子どもと関わる経験がしたい」という学生さんでボランティアをしてくださる方を募集しています。興味のある方はぜひ一度子ども図書室に足を運んでみてください！



現代社会にも通用する指南書!!

## 『 武田信玄 (全四巻) 』

新田 次郎 著 文藝春秋

工学部 機械工学科

ノダ ヨシユキ  
野田 善之

本館2階 一般書架 913.6

もしかしたら、多くの梨大生が読んでいるかもしれないが、あえて紹介したい。著者は「劔岳」や「孤高の人」などの山岳小説で有名な新田次郎氏で、2006年のベストセラーである「国家の品格」の著者である藤原正彦氏の父である。私はこの親子の作品を特に好んで読んでいる。

本作品のあとがきにも書かれているが、新田次郎氏は長野県諏訪の出身で甲州とは因縁が深く、武田信玄には惚れ込んでいたようで作品からもその気持ちが窺える。歴史小説としての面白みも然ることながら、私がこの本を薦める理由の一つは、この作品の舞台が皆さんに馴染みのある山梨であること。石水寺（積翠寺）や倉科（牧丘町）、志磨の湯（湯村温泉）、東光寺など甲府近隣の地名が多く現れ、山梨史跡巡りのガイドブックのようである。信玄が甲州を駆け巡っていた当時を想像しながら散策するのも楽しい。

また、武田信玄を語る際に軍師の山本勘助がよく取り上げられるが、信玄には駒井高白斎や馬場信春など知略に長けた有能な側近も多く、彼らの活躍が武田信玄を名将にしたといっても過言ではない。この作品は彼らの活躍が詳細に書かれており、信玄の魅力を高めるだけではなく、人材を機能させる組織力とは何かを考えさせられる内容となっている。さらに、武田信玄というと川中島や三方ヶ原の合戦などが有名で好戦的な武将のイメージが強いが、本作品では合戦後に制圧地の人々に安堵を与え、信頼を得る政策を実施している点を取り上げている。相手に良い仕事をしてもらうには、相手に信頼と安心を与えることの重要性を示している。このように歴史小説全般に言えることではあるが、本作品は現代社会にも通用する指南書としても活用できるのではないだろうか。



プレゼンテーションスキルを学び、向上させる!!

## 『 これだけは知っておきたい「プレゼンテーション」の基本と常識 』 若林郁代著 フォレスト出版

## 『 スティーブ・ジョブズ驚異のプレゼン 』 カーマイン・ガロ著 日経BP社

医学部整形外科学講座

ハロ ヒロタカ  
波呂 浩孝

分館2階 開架図書(第二) 336.49

医学部を卒業し研修医になった途端に、上司から研究会でスライドを使って発表するように指示されます。また、後期研修後に基盤領域の専門医試験を受験する際には、発表を行った実績を学会に報告しなければなりません。医師にとって、学会発表は卒業避けられないものです。医学部以外の卒業生でも社会でプレゼンすることは必須でしょう。私も研修医時代に作成したスライドは酷いものでした。文字が羅列し原稿と同じ文をスライドに記載する、図や表の配置に一貫性がない、カラーを多用するがその法則が不明、見づらい、量が多く聴衆がついていけない、など限りがありません。プレゼンテーションは聴衆の時間を拘束し、自分の発見や意見を聞いていただくものであり、熱意は必要ですが好意的で打ち解けた雰囲気を作ることと何といても“お伝えする良いスライド”が必要です。米国の大学に留学していたときに、PhD courseの大学院の授業では“presentation”のコースは必須でした。スライドが文章だけでは聴衆の記憶に残りづらく、視覚と聴覚を駆使したスライドを作成することが重要です。また、原稿の文は短く、聴衆へのアイコンタクトと会場内で一定の見直しを行うことも聴衆に印象を残すために大切です。何日も苦勞して作成したスライドと原稿の発表ですから、できる限り会場の聴衆に印象深くかつ好意的にプレゼンテーションを終えたいものです。

そこで、この2つの本を紹介します。1は基本的なプレゼンテーションスキルのノウハウが満載です。2は応用編として、人を惹きつける伝導者といわれた故スティーブ・ジョブズ氏の法則が述べてあります。これらを参考にして良い原稿とスライドを作成し、後は何度も練習をすることで上達すると思います。みなさんの参考になれば幸いです。





# 耐震・改修工事について



昨年11月から始まった耐震・改修工事も、残すところ1ヶ月をきりました。仮図書室・仮学習室があるとはいえ、ご不便をお掛けしている皆様に工事の様子をお伝えします。

工事が始まった当初は壁・天井・床と、全てを剥がし、砕いていきました。天井から針金がぶらさがり、壁から鉄条が飛び出している様は、写真集「軍艦島全景」のようでした。

年が明け、1階部分は大分工事が進みました。梁をなめらかにし、壁にはボードを打ちつけ、塗装するところもありました。しかし2・3階のコンクリート壁は砕いたままの状態。そして大きなサイズの窓に変えるために窓枠はもちろん、枠を取り付けていた壁まで取り壊した場所も。ガラんとした館内は猛烈な寒さ。その中でドリルや金属を切る音、職人さんの声が響いていました。

工事は日々進んでいます。3月に入り、ドリルの音はなくなり、何かを切る音、シンナーの臭いなど変わってきました。

4月OPENまであと僅か。より使いやすく、満足できる空間をご期待ください。



## 「生と死のコーナー」の講演会について



10月18日(金), 医学部キャンパスにおいて, 小森康永 愛知県がんセンター中央病院緩和ケア部部長をお招きし, 「ディグニティセラピーのすすめ」と題した講演会を開催しました。

この講演会は, 附属図書館医学分館「生と死のコーナー」の関連行事(平成25年度附属図書館医学分館地域貢献事業)として実施されたもので, 一般の方を含む約160名が聴講しました。

「ディグニティセラピー」とは, 終末期の患者さんの尊厳を維持することを目的とする精神療法的アプローチのひとつであり, がんの末期にある患者さんたちに, これまでの人生を振り返り, 自分にとって最も大切になったことをあきらかにしたり, 周りの人々に一番憶えておいてほしいものについて話す機会を提供するものです。



講演では, ディグニティセラピーで用いる質問紙の紹介や, ディグニティセラピーの実践から作成された文書の朗読が講師からあり, 日本では先駆的な精神療法であるディグニティセラピーについて順序だててわかりやすく講演されました。

参加者からは, 「その人の言葉で家族に届くのはとてもいいと感じた。とても心にひびく内容をお話ししてくださり, 胸が熱くなった。」, 「突然の病気で気持ちが保てない中, 自分の人生についてのとりとめのない話に誰かが耳を傾けてくれ, それを文章として大切な人に遺することができるということは, 患者さんの心の安らぎにつながるのではないかと思う。」などの感想が寄せられました。



参考: 愛知県がんセンター中央病院

[http://www.pref.aichi.jp/cancer-center/hosp/15anti\\_cancer/dignity-therapy.html](http://www.pref.aichi.jp/cancer-center/hosp/15anti_cancer/dignity-therapy.html)

## 医学分館 トイレ改修工事について



すでにお気づきかもしれませんが, 長らくご迷惑をおかけしていましたが, 医学分館のトイレ改修工事が終了しました。みなさんが心地よく使えるように, マナーを守ってご利用くださいますようお願いいたします。

# 今後のイベント

平成26年度山梨県・山梨大学連携事業

## 「子どもと読書活動をつなぐ・連続講座」全5回のご案内

子ども図書室では、山梨県と山梨大学の連携事業の一環として、山梨県立図書館と山梨大学の共同企画により、「子どもの読書活動スキルアップ講座」を平成26年度も実施します。テーマは「子どもと読書活動をつなぐ・連続講座」で全5回の開催です。

講座は、連続して受講することも、各回ごとの参加も可能です。

### 講座開催日程（予定）

- 第1回： 5月22日  
● 「ブックスタートからサードブックまで：乳児から中学生までをつなぐ実践」  
● 講師：加藤 原成 氏（富士吉田市立図書館長）
- 第2回： 7月17日  
● 「幼児期の読書活動：幼稚園の図書室でつなぐ実践」  
● 講師：鷹野 秀樹 氏（あおば幼稚園園長）
- 第3回：10月23日  
● 「新聞と学校教育をつなぐ」  
● 講師：有馬 進一 氏（慶応大学院生・元藤沢市教員）
- 第4回：12月4日  
● 「親子で楽しめる図鑑をつなぐ」  
● 講師：森定 泉 氏（講談社図鑑編集担当）
- 第5回： 2月27日  
● 「ワークショップ アニメーションでつなぐ」  
● 講師：向井 ひろこ 氏（関西大学初等部ライブラリー司書）

### お申し込み・お問い合わせ

山梨県立図書館サービス課 子ども読書推進担当

〒400-0024 甲府市北口二丁目8-1 TEL 055-255-1040 FAX 055-255-1042



◆イベント詳細については、ポスター・パンフレット・山梨大学附属図書館ホームページ等でお知らせいたします。皆様のご参加をお待ちしています。

### 学外の方への利用案内

本館及び医学分館は、山梨大学以外の大学生をはじめ一般の方々も利用できます。詳細については、<http://lib.yamanashi.ac.jp/>をご覧ください。本館 Tel:055-220-8066（情報サービスグループ）、医学分館 Tel:055-273-9357（医学情報グループ）にお問い合わせください。



● 表紙撮影：図書・情報課 職員  
場 所：山梨大学（医学部キャンパス）

山梨大学附属図書館報

「やまなし」

第11巻第2号

2014年3月3日 発行

編集：館報編集委員会

発行：山梨大学附属図書館

〒400-8510

甲府市武田四丁目4-37

TEL 055-220-8063